

令和3年度第2回社会教育委員会議 議事録

日時 令和3年12月22日(水) 10時～12時

会場 エル・おおさか 南101

出席者 岡田議長、大平副議長、大浦委員、大迫委員、大矢根委員、蔭山委員、小山委員、
榊井委員、明貝委員、山本委員

議事 (1) 令和3年度子ども読書活動推進事業実施報告等について
(2) 文部科学省委託事業「様々な居場所における子どもの読書活動習慣形成事業」実施報告等について

その他 (1) 近畿地区社会教育研究大会(大阪大会)についての報告

<意見・質疑要旨>

◆議事(1)令和3年度子ども読書活動推進事業実施報告等について

「概要」

○委員 イオンモール日根野で実施したえほんのひろばの事業について、隣の田尻町ではほとんどの人が知らないのではないかと。市町村が主体となり、イオンのような商業施設で実施しているのであれば、府政だよりも載せるだけではなく、イオンモール日根野をよく利用する熊取町や田尻町などの人に伝わるような工夫が必要。親はもちろん、おじいちゃんおばあちゃん世代に周知することも大事。ブックスタート事業も含め、市町村の担当課と連携して、もっと地域の人や高齢者の世代に伝わるようなキャッチコピー等を使って広報していくべき。

○委員 市町村が、行政施設ではなくイオンモールのような商業施設を使って実施するのであれば、行政の範囲だけではなく、様々なところと連携していくのがよい。例えば、府としてそれぞれの地域で活動されている方との連携があってもよいのではないかと。また、乳幼児健診の際に実施する場合、保健の事業は通知する対象が保護者になるので、おじいちゃんおばあちゃんにどう周知するかが課題である。核家族化が進んでいる中で、3世代同居が少ない現実があるのか、逆に夫婦共働きでも、実はおじいちゃんおばあちゃんが孫の世話をする機会が増えているという現実があるのかなどの現状把握も必要になる。

○委員 私は自分の子どもが小さい頃は仕事をしながら子育てをしており、本を読む時間がないぐらい忙しい毎日だった。両親と同居することになってから、両親がたくさん絵本をお下がりとしてもらってきて、私が仕事で遅くなる時などに、子どもが興味ありそうなものを寝かしつけの際に読み聞かせてくれた。また、幼稚園、保育園とも親子読み聞かせ会のような催しがあり、そこでいいなと思った本を買って、家で読み聞かせをした。私の周りでは地元の家を構えている人も多く、おじいちゃんおばあちゃんが協力的な家がほとんど。

少し話がそれるかもしれないが、絵本セラピーをしている友人が開催した絵本の読み聞かせ会に行った際、大人のための絵本の読み聞かせがあった。そこでは子どもが読む絵本を何冊も用意してくださっていて、それを子どものように一緒に繰り返し読んでみたり、どう思うか考えてみたりするワークショップなどがあった。ポロツとくるような絵本もあり、中でも「つらいときは逃げてもいいよ」という内容の絵本が印象的だった。大人になってから読む絵本もいいなと思い、帰ってからこの絵本を買おうと思った。そこにいられていた方は比較的高齢の方が多く、そういった取組みもとてもいいのではないかと考えた。おじいちゃんおばあちゃん、現役世代も含めて大人が読んで感動した本を子どもに伝えることが、一番響くのではないかと考えた。

○委員 大人向けの本の読み聞かせ会のようなものは需要があるのかもしれない。それが子どもへ繋がっていくことはあるのではないか。

○委員 様々なところで親学習の講座をさせていただく際、最後に絵本を読ませていただくことがよくあり、参加されたお母さんたちが涙を流して感動される場面がとても多い。絵本選びは難しいが、その日のテーマや雰囲気に合わせて、子どもや親の気持ちを柔らかくするような絵本を選んでいる。

資料を読み、「絵本は子どもが読むもの」、「デージー図書は障がい者向け」のように分けていることに疑問を感じた。電子図書は耳で聞けるところや、絵でわかるところがすごく有効なので、障がいがある子どもだけではなく、全ての子どもに良いのではないか。絵本も子どもだけではなく、保護者やおじいちゃんおばあちゃん、親学習を含めた幅広くいろんな方に参加していただけるようなイベントで活用していけばよいのではないか。今はコロナで参加者が多いと開催が難しい面もあるだろうが、イベントも親子限定とせず、おじいちゃんおばあちゃんも参加可能にするとよい。

茨木市もイオンモールでいろんな本を読むイベントをされていたが、先ほど言われたように市民は知らないことが多い。例えばローカルテレビなどで宣伝してもらおうとか、市報に載せるということもできる。茨木市のイオンには穂積図書館が併設されており、そこは高槻市や吹田市の方も多く来られるので、幅広く集客できるのではないかと思う。

また、今の子どもたちはあまり本を読まないかもしれないが、漫画だと結構興味を持って読む子が多い。漫画を入口に、調べ学習や、他の本を読む場合もある。高校生であれば絵本の紹介動画を作るスキルもあると思うので、府内の高校生が動画を作り、YouTube等を活用して広報するなど、いろんな方法があるのではないか。

○委員 ショッピングモールとしても本を読むイベントを目当てに来たお客さんが買い物することを考えれば、事前の周知に力を入れられる。他行政との連携とともに、そういった民間企業とも連携していくのは有効だと思う。文字を読みましようというのを文字で知らせてもなかなか伝わらないことが多いので、面白く伝えるための工夫は必要かもしれない。

○委員 ポップ作りコンクールと、ビブリオバトルについてはこれまでも何回か続けてきていて、事業として育てられているなど感じる。ポップの応募作品も1220作品くらいで、増えてきているなどという印象。こういったポップ作品やビブリオバトルの内容をもっと周知してもよいと思う。本は好きだが人前で喋るのは苦手という子もおり、学校側からするとコミュニケーション能力が必要となるビブリオバトルでは誰を推薦するか悩むこともある。

また、学校としてはポップ作りやビブリオバトルの取組みを、授業やクラブ活動などでも先生が取り入れられるような工夫があるとありがたい。本好きな子は学校の中に一定数いるが、総数としては少ないので、増やすためにはどうしたらいいのかというのが課題だと感じている。本を読むのはこうしたらいいよといった、教員が子どもに伝えられるような冊子があっても面白い。本が好きな一部の子はコンクールなどに興味を持つが、「なぜ本を読む必要があるのか」という疑問を持っている子も多い。実際に本を手にとって、紙媒体として読む必要があるのか、電子書籍ではだめなのかということが問題にもなっていると思う。

○委員 全国学力学習状況調査では読書をしない子どもが増えているが、スマホで何かを読むということ、子どもが読書とは認識していないことも考えられる。例えば、調べ学習として、ネットで検索するためにスマホを使うことは読むことに繋がる。あまり

固定観念で活字本を読むことのみが読書だとせず、もう少し広く考えた方がよいのではないか。フィクションを読んで情操を育てるという読書もあるが、行きつく先はやはり困ったときに調べて情報を得る手段として、文字を正しく使えることが一番大切。そういった実用的な情報を得るための読書もある。

○委員 G I G Aスクール構想によりタブレットが配付され、学校の調べ学習においても本で調べるのかタブレットで検索するのかなど、調べる方法を子どもたちに選択させるようになっている。教科書や資料集だけでなく、タブレットを見て調べることも読書になる。本というのはわからないことがあった時に、すぐに戻って見られるような使い方が非常によいと思うが、今の子どもたちの感覚は変わってきているなという印象。

また、内容や作者のことを知っている先生がお勧めする本は、子どもたちは読もうと思うので、そういったことを学校に周知していくのも有効だと思っている。地域との結びつきという点では、高齢者の方に昔の遊びや生活を教えてもらったり、地域のボランティアの方に読み聞かせに来てもらったりする。読み聞かせはスキルも必要なので、そういった方を養成するというのも大切だと思っている。放課後教室で読み聞かせに行かせてほしいという団体からの申し出もあった。そういった団体に、子どもたちがよく聞いてくれるようになるノウハウのようなものを伝えられるとよいと感じている。

○委員 子どもたちは多くの広告が出ている本よりも、学校の先生がおすすめする本を読むので、まずは大人が読まないといけないと思っている。この事業計画を見ると、ポップやビブリオバトルなどの取組みはとても良いと思うが、これらは結局、本が好きじゃないと参加しない。図書館の企画を見るとほとんどがポップとビブリオバトルなので、もっといろいろなことできないかと考えている。府の公式T w i t t e rの「さあ、本を読もう」というネーミングも伝わりにくい部分があるので、違うものの方がよい。

また、チラシなどの印刷物を、配付したタブレットに府から配信できないか。研究者という立場から配信するのはハードルが高いので、府としてこういったものもタブレットに配信できれば、子どもたちはすぐに見られるのではないか。

○委員 学校開放やおおさか元気広場も、たくさん子どもたちに来てもらうためには、学校の先生に紹介してもらうのが一番効果的。帰りの会などで「土曜日にこんなのがあるよ」、「おじいちゃんおばあちゃんも誘っていこうね」という一言があるだけで、参加人数が増える。タブレットを活用して、学校の先生からの紹介や開催に関する情報が配信されるとよいと思う。

○委員 本のそばにいる人が子どもに本をすすめるというのは、すごく影響力があるので良いと思った。高等学校も1人1台パソコンが配られたが、子どもは家に持って帰り、動画を見たりもしている。若者は動画を見るのが好きで、何気なく流していることもあるため、中高生ビブリオバトル大会やオーサービジットの動画を配信すれば、自校で取り組むだけでなく、動画で追体験できるので良い考えだと思った。動画配信と本をお勧めする身近な人の力などで、今まで本に近寄れなかった子が、自然と本に近寄れたらよい。

○委員 司書の仕事として本の分類も大切な仕事だが、本を買うという選書の仕事が一番大きな仕事。限られた予算の中で良い本を選ぶための選書論と呼ばれる考え方があり、現在の選書論のほとんどが1930年代にできたと言われている。理由は1930年代に

世界大恐慌のため、多くの人が職を失い、図書館へ行って調べ物をしようとするが、大不況のため図書館も本を買う予算がなかった。それでも本のリクエストがたくさん来るので、公共公立図書館は非常に困り、どんな本を選んだら良いのかという選書論が花開いたと言われている。必要に迫られたときに本を読む力というのは我々は持つておく必要があるし、そういったニーズにどう答えていくのかというのが図書館の一番大きな仕事だと思う。もう一つは、本は情操教育に必要である一方、焚書坑儒のように、為政者が愚民政策を行ったときには本や知識を最も問題視する。逆に言えば、読書をすすめるということは、クリティカルシンキングする人たちや正当な主張を言う人たちを育てることになるため、読書をすすめる際はその覚悟が必要だと思う。学校の先生の立場でいえば「先生そんなことも知らんのか」という生徒が出てくるということ。そういったことをちゃんと受け入れる覚悟を持ったうえで、動画をどう利用するのかということも含め、読書をすすめる必要があるだろう。

◆議事(2)文部科学省委託事業「様々な居場所における子どもの読書活動習慣形成事業」実施報告等について

〈概要〉

- 委員 幼児教育の観点では、子どもにとっての絵本は読書というより、見る、聞く、触れるという感性の部分を育てる目的がとても大きい。絵本は文字を教え込むものではなく、物事に興味を持つきっかけになるものなので、子どもたちの主体性や感性が育つツールとして大切に扱っている。そういった点で学校教育の読書というくくりとは少し異なる。幼児教育の基礎、生きる力の基礎を培うというのを大切にしているので、まずは絵本を読みたいという気持ちを育てる段階がある。子どもは自分の知的好奇心、関心に応じたワクワクドキドキするものを求めるときに、自ら絵本を選び取るような実態がある。そういった子どもを育てるために、教師を含めた大人は何をすればよいのが重要。まずは子どもに読み聞かせをするときに、例えば、泥だんご遊びをした日は泥だんごの絵本を選ぶなど、子どもの興味関心に一致したものを選ぶこと。本来ならば自分が読みたい本を読みたいときに自由に手に取るのが一番良いが、子どもの中には絵本にあまり触れない子もいるので、そういった子どもにも読み聞かせをしたり、地域の方々にお話しに来てもらったりする機会を意図的に作ることで、お話しに触れられる環境を作る。次に、たくさんある絵本の中から自分で選び取る環境を作る。自分で本を選ぶことをとても大切にしているので、図書室や図書館、絵本のお部屋にはみんなで行って、自分で選ぶという体験をさせている。毎週、子どもが好きな絵本を1冊借りて帰ることで、親は子どもがどんな本が好きかわかり、子どもの興味関心が理解できる。そして、絵本カードと一緒に持って帰り、絵本の題名や作者に併せて、親に1行だけ感想を書いてもらうようにしている。「あのおばけが怖かったね」、「ここが大好きでよく笑っていたね」といった親の気持ちを書き、それが毎週、積み重なっていくと、その子の好きな絵本の傾向やヒットするポイントのようなものがわかり、親子のふれあいのきっかけになる。そういったことを絵本の貸し出しの際に狙っていくことで、親がだんだん絵本を好きになったり、今度、本屋で買ってみようとなったりするのではないかと思っている。もちろん絵や字に興味を持つといった知的な部分での刺激もあるが、感性や主体性を育むことが大きく関連している。
- 今までは入園時に子どものおむつが取れていないことや、一人でご飯を食べられないことに困り感を持つ親が多かったが、おじいちゃんおばあちゃんがない家庭ではそういった思いを持っていない親が多い。身近に相談する人がいないことで子育てに関する情報が少ない保護者が多くなっている。

大阪市の読み聞かせのおじいちゃん、おばあちゃんたちに来ていただいたときに、絵本なしの素話をされた。それが教師にとってもすごく新鮮で、さらには子どもたちの中にも、聞くだけで理解できる子とそうでない子がいるという実態があった。今の

子どもたちには、物語や昔話を聞きながら寝かしつけられるという経験が少なく、いつも視覚を共用しているため、素話を聞く経験がなかなかないという課題が浮かび上がってきた。教員間で、絵本も大事だが素話でイメージを広げたり想像したりする楽しさを感じて、それが絵本に繋がっていくような活動も必要だと話をした。

大阪市では4歳児の支援事業として絵本を配付しており、その際に区役所の方から読み聞かせをしていただくことがある。こういった取組みを保護者にも宣伝すれば、保護者は幼稚園等だけではなく社会全体が支援してくれているような安心感を得られる。園と行政の情報が一致していると、より信頼度が増して効果も上がる。教育委員会などは学校園の力を活用して周知するやり方もあると思った。

○委員 ポップ作りの事業について、今年の優勝作品やダウンロード方法などを小中学校や図書館、本屋さんなどにお知らせしたり、結果を提示してもらったりすれば、より本を読んでもらえるようになり、事業の宣伝にもなるのではないか。中学校の図書館でも司書が工夫してポップを作っているのだから、使えるものが手に入ると嬉しい。

○委員 市の図書館としては様々なメニューのうち、どれに取り組むのかというのが課題。これまで、地域のボランティアの方と絵本の読み聞かせなどに取り組んできたが、ボランティアの方の高齢化が進み、活動の継続が難しくなっている。コロナ禍で活動が途絶えてしまい、再開が以前のようにできるかということも心配している。新たなボランティア人材の発掘や地域との連携をしていかないといけないと思っている。府のメニューにある養成講座のような支援があれば、市としても助かる。

○委員 公共図書館と学校の連携は非常に重要。図書館でレファレンスを行ってくださるのはすごくありがたいこと。「図書館に行けば関心のあることを調べてくれる」ということはアピールできたらよい。リーフレットについては、読み仮名を全部にうった方がよい。また、データとして大阪府から発信し、GIGAスクールのタブレットを持っている子どもたちに伝わればより効果的だろう。

文字を読む、絵を見るということが読書としてイメージされがちだが、聞くことも含めると非常に幅が広がる。例えばYouTubeでは多くの朗読が聞けたり、かつてのラジオドラマというものも似たような性質があったりする。そういったことも含めて読書活動をとらえていくことも必要かもしれない。